

2024年3月6日

主催（公財）ミズノスポーツ振興財団

## 「2023年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

公益財団法人ミズノスポーツ振興財団では、1990年度から「ミズノ スポーツライター賞」を制定しており、2023年度で34回目を迎えます。この賞は、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰するとともに、スポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待し、これからの若手スポーツライターの励みになる事を願い制定したものです。

3月6日（水）、グランドプリンスホテル高輪で選考委員会を開催し、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

なお、この「ミズノ スポーツライター賞」の表彰式は、4月23日（火）にグランドプリンスホテル新高輪で行います。

### 【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】（トロフィー、副賞100万円）

- ・『怪物に出会った日 井上尚弥と闘うということ』（講談社）  
森合 正範（もりあい まさのり）

### 【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】（トロフィー、副賞50万円）

- ・『日本プロ野球の歴史 —激動の時代を乗り越えて—』（大修館書店）  
菅谷 齊（すがや ひとし）

詳細は別記の通りです。

## 記

名 称： 2023年度 ミズノ スポーツライター賞

制定目的： スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰し、スポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの若手スポーツライターの励みになる事を願い制定

選考対象： 主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの

選考委員： 委員長 河野 通和（前「ほぼ日の学校長」、『中央公論』『婦人公論』『考える人』元編集長）

委員 上治 丈太郎（（公財）日本スポーツ協会 評議員）

” 長田 渚左（ノンフィクション作家）

” 杉山 茂（スポーツプロデューサー、元NHKスポーツ報道センター長）

” ヨーコ セッターランド（日本女子体育大学 准教授）

” 水野 英人（（公財）ミズノスポーツ振興財団 副会長）

※順不同

対象者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由：

**【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】**

### ●『怪物に出会った日 井上尚弥と闘うということ』

（講談社）

森合 正範（もりあい まさのり）

2023年12月26日に有明アリーナでWBA・IBFスーパーバンタム級統一王者のマロン・タパレスを10回KOで下し、2階級での世界四団体統一を達成したばかりのプロボクサー、井上尚弥の桁外れの強さに独自の視点で迫った一冊である。東京新聞のスポーツ記者でボクシングに精通する著者が、世界最高峰のボクサーの強さを、敗者を通じて語らせた一冊。

著者は学生時代の4年間、ボクシング好きが高じて「聖地」後樂園ホールで裏方のアルバイトをした。その時に、試合前にボクサーへグローブを手渡し、試合後に受け取る仕事があったが、敗者のグローブが勝者のものより重く感じたそうだ。記者となってボクシングを取材するようになり、井上の試合前インタビューを「週刊プレーボーイ」に掲載するようになった。しかし、「怪物」の強さを伝え切れていないモヤモヤがずっと胸の内にあったという。ある時、同じボクシング好きの編集者に「井上と対戦した相手取材していったらどうか」と提案され、このシリーズを始めた。

稀有のモンスター的存在のボクサーをどう描くか、ボクシングという肉体とメンタルを極限まで追い込んで闘うスポーツの迫力をどう伝えるか、自分が書こうとする対象、テーマに対する著者の熱量、怪物井上尚弥と対戦し敗れた相手に話を聞くという発想・企画力、遠くはメキシコやアルゼンチンまで足を伸ばしての取材、物語性のある構成、奇を衒わない抑制の効いた文章表現、本書にはスポーツノンフィクションの真髄というべき要素が揃っている。

著者がスポーツライティングを意識することになったという山際淳司の「江夏の21球」以来の、本格的なスポーツライティングになっていると高く評価したい。

## 【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】

### ●『日本プロ野球の歴史 —激動の時代を乗り越えて—』

(大修館書店)

菅谷 齊 (すがや ひとし)

書名を超えるような内容の一冊である。400ページ超の重量感のある作品のレベルは、推薦者である慶応義塾大学池井名誉教授の「極めて魅力ある労作」という帯に抜き書きされた短い評価がまさに言い当てている。

昨2023年は、3大会ぶり3度目のWBC制覇に始まり、大谷翔平の2度目のMVP獲得に続くドジャースへの超高額移籍だけでなく、阪神タイガースの38年ぶり2回目の日本一、プロ野球ではないが慶応高校の107年ぶりの甲子園優勝などが続き、人々の野球への関心はこれまでになく高まった。本書の発行はまさに絶好のタイミングだったと言えるだろう。裏話が満載の大小100本を超える興味深いコラムが随所に挿入され飽きさせない。巻末には年表と文献資料を一覧にしてまとめるなど配慮が行き届いており、どこからページを開いても楽しく読め、眺められる。

抑制の効いた中にもリズム感がある文体でたいへん読みやすい。著者は自らの思いを極力排除し事実の正確な記述に努めたようだ。記者としての本分ということかもしれないが、時に感情を表に出しても構わないのではないかと恐らく唯一、コミッショナーに関して「日本のプロ野球の場合、(コミッショナーの仕事の)多くはトラブル解消の仕事に見え、大リーグとはかなり異なる。」とご自身の意見を記している(P219)。

作者はこの書籍化をプロ野球記者50数年の取材総括と位置づけ、全力投球をしたといえるだろう。「時代の移り変わりや難題を乗り越えて今日の姿があることを、後世に伝える機会がこの出版だった」と振り返るが、自らもプロ野球史に名を刻んだのではないだろうか。

以上

(お問合せ先)

公益財団法人ミズノスポーツ振興財団事務局 藁澤・澤井 TEL. 03(3233)7009  
ミズノ株式会社 コーポレートコミュニケーション室 木水 TEL. 03(3233)7037